

エドゥアール・グリッサンの詩の ビジョンに関する覚え書き

—サン=ジョン・ペルス論とエメ・セゼール論について—

早川卓亜

カリブ海フランス海外県マルティニク島出身の作家エドゥアール・グリッサン（1928–2011）は詩集、小説、戯曲のほかに、多くの評論を発表した。その内容は他の作家に関する論考、マルティニクをはじめとするカリブ海地域の社会・文化論、南北アメリカの芸術を取り上げた美術論など多岐にわたる。筆者は本論をグリッサンの評論のうち文学論、とりわけ詩論を理解する作業の第一歩として位置づけ、同じカリブ海出身の詩人サン=ジョン・ペルス（1887–1975）とエメ・セゼール（1913–2008）に関する論考の内容を整理する。グリッサンは二人を繰り返し取り上げており、この言及の多さは彼の文学活動の中でペルスとセゼールが占める重要な位置を示唆していると考えられる。主なペルス論とセゼール論のいくつかを整理したうえで、本論の終わりにはグリッサンが提出した詩に関する重要なビジョンに論及する。

1. サン=ジョン・ペルス論

サン=ジョン・ペルス（本名アレクシス・レジェ）はグアドループ島の農園を経営する富裕な白人の一族に生まれた。家業が傾きつつあったため、彼が12歳のとき一家は島を離れフランス本土に移住する。ペルスは1914年から1940年まで外務省に勤めたが第二次世界大戦中にアメリカ合衆国に亡命し、1957年にフランスに帰国、その後フランスと合衆国を拠点に生活した。主な詩集は *Éloges* 『讃』（1911年）、*Anabase* 『遠征』（1924年）、*Exil* 『流謫』（1942年）、*Vents* 『風』（1946年）、*Amers* 『航路標識』（1957年）、*Oiseaux* 『鳥』（1962年）である。⁽¹⁾

以上の背景を踏まえてグリッサンのサン=ジョン・ペルス論を見ていこう。グリッサンによる主なペルス論は、*L'Intention poétique* 『詩的意図』（1969年）所収の文章、*Le Discours antillais* 『アンティル論』（1981年）の「*Sain-John Perse et les Antillais*」[サン=ジョン・ペルスとアンティル人]⁽²⁾、*Poétique de la Relation* 『〈関係〉の詩学』（1990年）⁽³⁾の「*Une racine enracinée*」[根づいた流浪]、メアリ・ギャラガーの研究書『サン=ジョン・ペルスのクレオール性』（1998年）に寄せた序文「*L'Étendue et la Profondeur*」[広がりと深さ]の4本である。ここでは比較的理解が容易だった

「サン＝ジョン・ペルスとアンティル人」と「広がりと深さ」の内容を順に整理する。

「サン＝ジョン・ペルスとアンティル人」

ペルスにあってはさまよが増すほど言葉が「固定する」。トウルヴェール「…」言葉による純然たる建造物がさまよいの空虚に対する最初で、唯一の、応えであるかのように。世界は「西」にあり、「西」は言語だ。ペルスはそこに自らの真のすみかを築く。この不可能な家の戸口、「…」それは言葉だ。そして言葉は棟木でもある。肉は「言葉」に戻る。こうしてペルスは西洋の最後の「全体の」表現に封印をする。彼はある体系化された世界の最後の吟遊詩人だ。トウルヴェール「…」⁽⁴⁾

「サン＝ジョン・ペルスとアンティル人」はこうして始まる。ペルスの詩の言葉は彼自身のさまよいと対応関係にあり、詩人は言語としての「西」、つまり言語によって構築された観念としての西洋世界に自らのすみかを、すなわち存在の根拠を築く。しかし、その根拠もまた言葉でできている。ここにはペルスの詩の言葉が避けがたく抱える不安定が示唆されている。次いで、ペルス詩の試みの背景に関する考察が展開する。グリッサンはカリブ海のフランス領の島に生まれたことこそがペルスにさまよへの道を開いたと述べる。本土の歴史からしばしば疎外される一方、本土への移住後はカリブ海生まれの出自を排除せねばならなかったであろうペルスは、植民地生まれの白人の抱えるねじれを生きた。初期の作品で生地の自然を、風景を見事に描き出した点では詩人はアンティル人だった。一方で彼は少年期に本土に移住し、カリブ海の歴史に折り込まれてはいなかった。純然たる企図としてのさまよこそが自らの歴史だったペルスは、絶えず出発すること、「西へ発つ」ことを選ぶ。そこでは西洋はもはや具体の所与ではなく、一つの理想となる⁽⁵⁾。

グリッサンによれば、ペルスの偉大は超越によって歴史と自然との間の断絶を要約しようとした点にあり、ペルスの模範はもはや自らの似姿ではない世界へ差し向けられた西洋の二裂した姿を示した点にある。世界各地を訪ねたが生まれ故郷グアドループに戻ることはなかったこの詩人は（隔たりとさまよによって）自身の世界との関係の二重の両義性を示し、この両義性から絶対の言葉との純然たる関係を作り出すまでに至った⁽⁶⁾。

「…」体系としての世界の最後の吟遊詩人。トウルヴェールだが、世界はもはや体系化され得ない。あまりにも多くの他者が、他所が、静かな水面を揺り動かす。この動揺に対し、ペルスは「固定する」ことを試みる。散り散りになろうとしており、かくも多くの唐突な所与に押し寄せられているものを言葉に固定することを。普遍がその根元までおびやかされているがために、ペルスは普遍の光を一挙によじ登ろうとするだろう。⁽⁷⁾

「言語で一つの家を（言葉で一つの現実を）作ろうとする執拗な試みは、このように世界の「解体

構造] « déstructure » に対応している。」⁽⁸⁾

「広がりと深さ」

この序文の冒頭でグリッサンは、サン＝ジョン・ペルス作品の二つの様相を指摘する。一つは「サン＝ジョン・ペルスとアンティル人」の整理で見たように、「普遍」の認識へと向かう一様で執拗な運動である。もう一つは「目を見張るような、あるいはひそかな細部において、地質学において、岩々の永続する輝きと砂地の熱を帯びた流れにおいて、現実を「数え上げること」« dénombrement »⁽⁹⁾ である。普遍への絶えざる志向と詳細で具体的な現実の数え上げ、この両者の均衡は、詩人の単なる意図を、普遍への純粋な願望を超え、全体性 - 世界 la *totalité-monde* に関するある詩学への我々の接近を可能にするという⁽¹⁰⁾。そしてグリッサンは、ペルスの五つの詩作品を以下のように要約する。『讃』はカリブ海世界を凝縮して表現している—「列島と水泡のエクリチュール。水の場所、そこから絶えず出発せねばならない。」⁽¹¹⁾ 『遠征』では太平洋の逆巻く大波が、延々と続く行程が、うねり連なるアジアの高地に重ねられる。『流謫』は大西洋の憂鬱で細かい波しぶきを堆積させる。これら三つの作品は具体的場所と結びついているが、『風』と『航路標識』は地理的具体性を欠き、力そのものの詩である。「永遠の水域と斥け得ない声。」⁽¹²⁾ 総じて、ペルスの詩は海の詩である。征服と探検、諸文化間の電撃的な接触や錯綜したネットワーク、支配された民族の緩慢な不幸と同じく、海は世界をクレオール化する⁽¹³⁾。

ここで話題はペルス作品におけるクレオール化へと展開する。エミール・ヨヨの研究（『サン＝ジョン・ペルスと語り部』⁽¹⁴⁾）以降、ペルスの詩ではクレオール化が作用していること、フランス語がクレオール語に接していることが明らかにされてきた。グリッサンによれば、ペルス詩におけるクレオール化は大抵の場合隠されてごく目立たないかたちをとり、精妙な曖昧さをもたらしている。この「隠された」クレオール化 la *créolisation* « *dissimulée* » は、口承民話の語り部の手法に基づく。具体的には、記述における積み重ね、物語におけるくり返し、詩的高揚における半諧音、細かく刻まれるリズム、そして一覧的な列挙である。これらの手法によって、現実は一様として編まれ、現実はあるゆる偽りの深さをしりぞける。また、語り部の手法に基づく点は、同じくアメリカ新大陸のプランテーション社会を出自とするウィリアム・フォークナー（1897-1962）と共通するとグリッサンは指摘する⁽¹⁵⁾。⁽¹⁶⁾

2. エメ・セゼール論

次にエメ・セゼール論について。グリッサンの主なセゼール論は『詩的意図』に収められた文章⁽¹⁷⁾、*La Cohée du Lamentin* 『ル・ラマンタンの入り江』（2005年）所収の« *La Poésie* » 「詩」、そして *Philosophie de la Relation* 『〈関係〉の哲学』の第23章である。以下、順に整理していこう。

『詩的意図』のエメ・セゼール論

『詩的意図』所収のエメ・セゼール論で、グリッサンは *Cahier d'un retour au pays natal* 『帰郷ノート』(初版 1939 年、決定版 1956 年)⁽¹⁸⁾ をまず取り上げ、次のように述べる。「十全な自己意識に達するため、人はまず自らの土地を発見することから始める。⁽¹⁹⁾」「そして土地をめぐり、「急流のぎくしゃくした喜び」に押し流され、あまりにも悲惨な光景を前に、「破れた木琴よりも星々が死んでいる、不動の大いなる夜」を前に、こぶしを握りしめ、詩人は彼に属すものを、彼だけに属すものを数え上げる。そして彼は世界の光のもとで一つの場所を要求する。これは、十全の意味で、世界の中へ向かう自己の認識である。⁽²⁰⁾」「詩は世界を見出した喜びを呼吸する。⁽²¹⁾」次いで *Les Armes miraculeuses* 『奇跡の武器』(1946 年) について、アンティルの土地を特徴づける気候、植生の種類、豊富さと環境、地理の状況、歴史が記されていることを指摘する⁽²²⁾。セゼール作品の世界、それは個人と歴史の生成の世界であり、詩的開花は世界の中の自分自身の位置に関する深い意識をもたらす。世界へ生まれること、それは日の光のもとに、そして意識の光のもとに来ることである⁽²³⁾。グリッサンはこのように、世界へと生まれ、自らの占める位置を確立し、世界と関係を結ぶことにセゼールの詩の本質を見る。

また、詩人が自らの詩学を行使する「文化圏」*« zone culturelle »* についても論じられる。その圏域はいまだ他者に印しされすぎているという。「人が根づくのは願いのうちではなく(その願いが根を叫ぶものであっても)、遠くの地でもない(それが母なる大地アフリカだとしても)。そのように根づくとしても普遍への(もう)ひとつの抽象の過程を再開することになる。自らの固有の富によって全体の関係に貢献すべきなのだ。願いから現実へと歩まねばならない。[...] セゼールの作品が十全な意味をつかむのは、土地そのものの文学に組み込まれるときだろう。[...] (他所で、たとえばフランスで、あるいはアフリカで、引き受けられたとしても) 作品が自らの土地から承認を受けなければ、作品は色あせ、光彩を失いかねない。すなわち、自らが生じた地が不在のままでは思考を欠き、同化された、創造的でない作品だ。[...] 詩は先に立って地の「論拠」を築くことはできるが、遠く離れて地の手応えや味わいを糧とすることはできない。詩はその手応えと味わいをあらわすのだ。⁽²⁴⁾」

セゼールの詩をめぐる以上の議論から、自らの拠って立つ土地を見出し世界の中に位置づけ、その過程が自己と世界との関係についての認識をもたらすという詩のあり方にグリッサンが重きを置いていることがわかる。これはグリッサン自身の詩や小説を考える上でも重要な観点である。

「詩」

評論集『ル・ラマンタンの入り江』に収められた「詩」は地名の列挙、リズム、イメージ、他の詩人からの借用という四つの観点からセゼール詩を論じる。ここでは地名の列挙に限定して内容を整理する。冒頭では、上で見た『詩的意図』のセゼール論と同じく、詩人と世界との関係に言及が

なされる。「[「詩人」は立ち上がる、彼は彼とともに世界を持ち上げる。初めから彼が自らのものだと知っている役目だ。彼が彼のうちに併せ持っている、苦しみと喜びだ。⁽²⁵⁾」次いで、『帰郷ノート』の「あなた方は彼らのために私の抗しがたい愛を知っている」という詩句⁽²⁶⁾の意味は、詩人が「この世界の肉から身を離すことができず」、「自由に世界から逃れることはできず」、「世界の全ての味わいの、世界の全ての凹凸の名を、ひとつ残らず挙げるという並外れた仕事を自らに課す」ということだと述べる⁽²⁷⁾。そしてセゼールの詩から地名が登場する箇所を列挙した後に、以下のよう記す。

国々は駆けつける、ひしめき合う。列挙、幸福な列挙は、詩の総体で繰り広げられ、尽きることがないように見える。だがこの列挙は普遍に属するものではない。つまり、この列挙は個々の場所から何の一般化する観念も精練しない（普遍は個別の中にはない。個別の中に普遍を置く、あるいは個別の中に普遍を想定するのは我々だ）、こうした列挙が完成するのは、あらゆる詩人の言葉—つまり行為—を是とするもの、激しい動揺の中で堆積する世界の「全体性」la Totalité、そう、「全-世界」le Tout-Monde の脆いがしかし消すことのできない反響だ。

それは単なる地名集ではなく、解きほぐせないほど錯綜した原初の地質学が我々の夢の戸口をたたくのだ。一般化する観念ではなく、各地の民の不幸とすさまじい痙攣が混然として埋もれているのだ。ここに積み重ねられた国々は、泥沼と繁く交通し、転覆し、殺人者たちに立ち向かい、荒々しく、凸凹で、唾し、熱狂し、ささくれ立っている。いわば、国々は地下の轟きを糧とし、その轟きは我々の現実の奥底にかじりつき、詩人はその轟きと交通する。[…]⁽²⁸⁾

ここでグリッサンが言わんとするところは、セゼールの詩に登場する地名が各地の民の苦難と結びついているということだろう。個々の地名とその土地に暮らす人々は、全体化した（つまり世界化、グローバル化した）世界の中の、普遍に回収されない具体である。

『〈関係〉の哲学』のセゼール論

エメ・セゼールが死去した2008年に出版された『〈関係〉の哲学』の第23章でグリッサンはセゼールの生涯と詩業を回顧している。ここではセゼール詩の特徴を述べた箇所のみをとりあげる。グリッサンによれば、セゼールの詩の特徴は（シュルレアリスムによって代表される）言語に関するあらゆる異議申し立てと革新という現代西洋の詩学と、リズムの力、驚異、過度、ユーモアといった黒人の詩学との協働にある。黒人の詩学の手法は、積み重ね、半諧音、眩暈などである⁽²⁹⁾。ここで本論でのペルス論とセゼール論の整理を振り返って、積み重ねと半諧音は「広がり」と深さ」でペルスの詩の特徴として挙げられていたことを思い起こそう。

そして、次のように記された箇所がある。

ときにフランスの読者はセゼールの詩が韻律 *measure* を欠くと非難するが、彼の詩は、まったくもって韻律の詩である。ただし、その韻律は過度 *une démesure* を、つまり世界の過度を測る韻律である。⁽³⁰⁾

「世界の過度を測る韻律」*« la mesure d'une démesure »*。グリッサンにとってこの表現はセゼールの詩の特徴を凝縮した定式であり、実はセゼールとペルスの共通項でもある。

3. 「過度を測る試み」と「過度を過度で測ること」

実は「世界の過度を測る韻律」と同様の表現は「広がりと深さ」にも登場する。該当箇所を引用する。

我々はこの〔ペルスの〕作品を「過度」を測る試み *une mesure de la Démesure* としてとらえて（提案して）接近することができる。過度とは、世界の、我々の錯綜した現実の、終わることのない衝突の、思いがけない出会いの過度である。つまり、クレオール化。さまざまな風景がこの予見しがたい出来事たちの中で接続する。砂地は海の大波と同じ風に渦巻き立ちのぼる。諸人類はあらゆる事物が碎け散り響きわたるこの騒音の中、互いに耳を傾ける。この点にこそ我々が分かち持つものがあり、詩人たちはそれを予感していた。[…]⁽³¹⁾

これを踏まえると、「世界の過度」*démesure du monde* とは、測定から逸脱し予測不可能な、クレオール化する全体性としての世界の様相を凝縮した表現だと理解できる。また、「広がりと深さ」の冒頭ではペルス詩の特徴の一つである「現実の数え上げ」が全体性 - 世界の詩学の一要件として、「詩」ではセゼール詩における地名の列挙が世界の「全体性」の堆積の過程としてとらえられている。数え上げ、列挙の手法は総体の把握が不可能な全体性としての世界を、構成要素を積み重ねる過程の中で認識していく詩的方法論と考えてよい。植民地の白人農園主の家系に連なり、世界各地を移住し、生地グアドループに戻ることのなかったさまよいの詩人サン＝ジョン・ペルス。黒人奴隷の子孫であり、詩と政治の両面でマルティニクを世界の中に位置づけようとしたエメ・セゼール。対照的な二人の詩人の作品の中に、グリッサンは奴隷制プランテーション社会で生成した口承伝統を共通項として見出し、この伝統に基づく詩の手法をグローバル化した現在の世界を認識する手だてとして提示している。

「広がりと深さ」の最後に、今日の芸術表現に関し「過度を過度で測ること」*une démesure de la démesure* という定式が示される。「世界の縫れ絡まりに、我々がそこを通過して生きる、調節されていない軌跡たちに、同意すること。⁽³²⁾」この定式を敷衍すれば、測定不可能な混沌としての世界の詩的認識たる混沌の詩学、と表現することができるだろう。おそらく、グリッサンはこの定式のも

とに自らの詩を、詩学を位置づけていた。今後の課題の一つは作品に即し、その実質を検討することにある。

註

- (1) ペルスの伝記に関しては、プレイヤード版全集（1982年[初版1972年]）冒頭に置かれた伝記、日本語訳『風』（有田忠郎訳、書肆山田、2006年）の訳者解説「島から島へーサン＝ジョン・ペルスという難問」（199 - 229ページ）、中村隆之の論文「グリッサン、フォークナー、サン＝ジョン・ペルスーポストプランテーション文学論の試み」（土屋勝彦編『反響する文学』風媒社、2011年、60 - 89ページ）、恒川邦夫著『《クレオール》な詩人たち I』思潮社、2012年の第I章「サン＝ジョン・ペルス」（51 - 77ページ）を参照した。
- (2) 初出は1976年2月の『新フランス評論』サン＝ジョン・ペルス追悼号。La Nouvelle Revue Française, « Hommage à Saint-John Perse », Gallimard, février 1976, pp. 68-74.
- (3) 日本語訳は管啓次郎訳、インスクリプト、2000年。
- (4) *Le Discours antillais*, pp. 742-743.
- (5) cf. *ibid.*, pp. 743-745.
- (6) cf. *ibid.*, p. 746.
- (7) *Ibid.*, p. 747.
- (8) *Ibid.*, p. 747.
- (9) Mary Gallagher, *La Créolité de Saint-John Perse*, Éditions Gallimard, 1998, p. 11.
- (10) cf. *ibid.*, p. 11.
- (11) *Ibid.*, p. 11.
- (12) *Ibid.*, p. 12.
- (13) cf. *ibid.*, pp. 11-12.
- (14) Émile Yoyo, *Saint-John Perse et le conteur*, Bordas, 1971.
- (15) Mary Gallagher, *op.cit.*, pp. 12-14.
- (16) 註1に挙げた中村論文は Valérie Loichot, *Orphan Narratives : The Postplantation Literature of Faulkner, Glissant, Morrison, and Saint-John Perse*, University of Virginia Press, 2007 を踏まえてグリッサンによるサン＝ジョン・ペルス論とフォークナー論を読解し、アメリカ新世界のプランテーション社会を背景に生まれた各国の文学を併せ論じる視点を提出している。本論はこの論考に負うところが大きい。
- (17) この文章の前半の初出は『新文芸』1956年1月号の「エメ・セゼールと世界の発見」である。「Aimé Césaire et la découverte du monde », in *Les Lettres Nouvelles*, n° 34, Éditions René Julliard, janvier 1956, pp. 44-54.
- (18) 日本語訳は砂野幸稔訳、平凡社ライブラリー、2004年 [平凡社、1997年]。
- (19) *L'Intention poétique*, p. 138.
- (20) *Ibid.*, p. 138.
- (21) *Ibid.*, p. 139.
- (22) cf. *ibid.*, p. 139.

(23) cf. *ibid.*, p. 141.

(24) *Ibid.*, p. 143.

(25) *La Cohée du Lamentin*, p. 108.

(26) 本論で参照した全詩集 *La Poésie*, Éditions du Seuil, 1994 所収の版にはこの詩句は見当たらない。グリッサンが参照している版は明らかにできなかった。

(27) *Ibid.*, p. 108.

(28) *Ibid.*, p. 110.

(29) cf. *Philosophie de la Relation*, pp. 132-133.

(30) *Ibid.*, pp. 133-134.

(31) Mary Gallagher, *op.cit.*, p. 16.

(32) *Ibid.*, p. 17.